

C・L・R・ジェームズの ハイチ革命論

奈良大学 青木 芳夫

1 はじめに —— 革命200年

昨年(1989年)の1989年は、フランス革命200年であった。そして来年(1991年)は、ハイチ革命200年にあたる。1791年8月14日の夜、ハイチのカイマンの森に集合した数百の黒人奴隷たちは、砂糖プランテーションに対する一斉蜂起を誓い合い、やがてそのなかからトゥサン＝ルヴェルチュール¹⁾、デサリーヌ、クリストフら元奴隷の指導者たちが頭角をあらわし、そしてついに1804年にはフランスからの独立を宣言する。

このハイチ革命は、まず第一に奴隷革命としては世界史上で唯一の成功例である。第二に、その結果誕生したハイチ共和国は、世界史上はじめての黒人共和国となった。第三に、西半球では米国につぐ二番目の独立国となり、その後のラテンアメリカ諸国の独立の口火をきった。そして最後に、反乱に参加した黒人奴隷の三分の二がハイチ生まれではなく、アフリカ生まれだったことからすれば、彼ら自身の故郷から遠く離れた地においてであれ、西欧諸国による侵略・植民地化からの「先住民」自身による解放の最初の成功例であったといえなくもないだろう。このような評価は、今日ではほとんど異論なく受け入れられているとみてよい。しかしながら、われわれは、ややもすればハイチ革命のことを忘れてしまい、ましてやフランス革命と結びつけて考えようとはしない。ハイチ革命は、今日ではわれわれにとり「見えない革命²⁾」の一つとなってしまった。

本稿で取り上げる『ブラック・ジャコバン』(初版 1938年)の著者C・L・R・ジェームズ³⁾は、カリブの小島トリニダードトバゴ生まれの黒人系マルクス主

義者であり、その素朴な人民主義史観と鍛えあげられたインターナショナリズムとにより、両革命の相互関連性をとらえることに成功している。そのうえ、それまでのカリブ研究を「カリブに関する著述家たちはつねに……西欧文明にのみ自らを関連づけようとし、決してカリブの歴史との相関のもとで自己をとらえようとはしない」（1963年版序文）と批判し、「つねに搾取され虐待されるような客体としてではなく、自ら大規模な行動を起こし、自分たちの必要のためには他の人々をも指導するような主体的存在」（1980年版序文）として、アフリカ人とその子孫たちを描こうとしたジェームズにとり、ハイチ革命はまさに、砂糖プランテーションと黒人奴隷制とによって規定されてきたカリブ史の起点となるべき歴史的転換点であった¹⁾。そしてカリブ人の主体的な歴史としてジェームズが描いてみせるハイチ革命論は、それ自体「周辺から見た」フランス革命論であり、さらには世界史論となっているのである。本稿では、フランス革命との関連で最近注目されているリン・ハントらの政治文化アプローチ、そして世界史論との関連ではウォーラーステインらの世界システム論と重ね合わせながら、主としてジェームズの『ブラック・ジャコバン』にそって説明し、できればその再評価を試みてみたい。

II フランス革命とハイチ革命

フランス革命とハイチ革命の相互関連性を理解するためには、次の事実を指摘しさえすればよい。つまり、フランス革命が起きていなければ、植民地ハイチでは大規模な奴隷反乱も起こらず、トゥサンもデザリーヌも、またクリストフも、ただの人としてその生涯をおくっていたことだろう。また、1793年9月から1798年10月まで、実に5年間の長きにわたり、6万もの兵力のイギリス軍がハイチ革命に干渉してくるが、もしそれが成功していたならば、革命フランス自身の命運も危うくなっていたかもしれない。イギリスの野望を挫き、フォーテスキューをしてイギリス軍にとり史上もっとも不名誉な大敗北といわしめたのは、トゥサンら元奴隷たちの働きによるところ大であった。

ところでフランス革命史家のリン・ハントは政治文化アプローチをとるが、篠原一のいう「社会科学的歴史派」に加えることができるだろう。フロイドの「家族ロマンス」を採用した報告論文（1990年）においてハントは、父＝国王の権威が崩壊していき（1789～91年）、自分たちを兄弟になぞらえる革命家たち、急進

的な共和主義者たちは、父である国王を処刑する（1793年1月）が、やがて「父」との妥協を模索するようになり、そして「父」の権威はナポレオン期に完璧に復活することを跡づけた。フランス革命の流れに関するハントのとらえ方は、次の西川長夫（1990年）のとらえ方と基本的に同じである。

西川は比較史の立場から、フランス革命の終期をブリュメール18日のクーデターによりナポレオン・ボナパルトが権力を掌握する1799年で切らずに、ナポレオン期を含めて1815年までとすることを提案した。このほうが国民統合の視点から、言い換えるならば国民国家の形成という観点からすれば、そして日本を含めて他国の経験と比較するうえからも都合がよいと指摘している。西川によれば、フランス革命は次のように時期区分し説明することができる。

第一に、三部会召集の前後から立憲君主制をうたった1791年憲法が制定される前後までの時期である。この時期にそれまでの「祖国」にかわり、「国民」という言葉と概念が革命的な意味をもち、広く受け入れられるようになる。「自由・平等・友愛」の前に「国民・法・王」というスローガンがあったのである。三色旗や「ラ・マルセイエーズ」の歌がつくられるのもこの時期である。

第二の時期は、王の逮捕（1792年8月10日）から共和制が宣言され（1792年9月22日）、山岳派の独裁（1793年6月2日）からテルミドール9日の反動（1794年7月27日）に至る時期である。この時期には国内外の戦争の危機により愛国心が高揚され、排他的なナショナリズムへ転化する傾向もあらわれるが、それと同時に一種の「文化革命」の時期にあたり、言語の統一やメートル法・革命暦の採用が決まる。ともかく既成の価値観が根底から動揺した時期であり、多くの女性が革命や政治に参加するようになったり、民衆がもっとも積極的に政治に参加するようになるのもこの時期のことである。

第三の時期は、ブリュメール9日のクーデター以後の時期であり、「国民」の概念が、「国家」の概念のなかに整理、回収されていく時期にあたる。西川は新しいイデオロギー、彼の用語によれば「国家宗教」の創出にフランスは失敗したと結論するが、その当否はともかく、同時にこの統合過程から排除されたものとして、地方の文化、下層の民衆や農民、女性、外国人をあげている。この点は重要な指摘と考える。

次に、このような時期区分にそって、とはいってもかなりの時間のズレがあるが（当時の技術からすれば、フランス・ハイチ間のコミュニケーションのためだけでも、1～2ヵ月を要した）、ハイチ革命の場合を考えてみよう。

第一の時期には、ハイチでは主として白人の間で、植民地代表権の問題が議論されていた。特にハイチの特殊性としては、この問題が白人層（これにはビッグ・ホワイトとスモール・ホワイトを区別する必要があるが）とムラート、つまり混血層との間で議論されたこと、そしてそれにはムラートの参政権を認めるか否かということが絡んでいたことを、指摘することができる。ムラートの参政権については1791年5月15日法令により自由人を両親にもつ有色人に参政権が付与されることになり、該当者は数百人にすぎなかったものの、まず突破口が開かれた。この法令は半年もたないうちに撤回されてしまうが、1792年3月24日法令により最終的に植民地の有色自由人に市民権が付与されることになった。黒人奴隷についてはハイチでもフランス本国でもまださほどみんなの念頭にはなかったようである。しかし白人層と混血層が抗争している間に、1791年8月には黒人奴隷が反乱を起こす。また混血層のなかからも西部のリゴーのように武力蜂起する勢力もあらわれた。

第二の時期になると、島内では白人支配が復活する可能性はなくなっていき、ムラートか黒人か、という選択になっていった。ハイチに派遣された文民代表の全権委員のソントナクスは、王党派軍隊やスペイン・黒人奴隷同盟軍に悩まされていた1793年8月29日に、プランテーションに戻ることを条件に奴隷解放宣言を出す。それでもトゥッサンを味方につけることはできなかった。同年9月からはイギリス軍による干渉がこれに加わり、ソントナクスはますます苦境に立たされる。フランス本国で国民公会が奴隷解放を宣言するのは1794年2月4日のことである。この時期にはフランス民衆の政治への参加がもっとも強かったわけで、この宣言も彼らの圧力によるものだった。コーヒーには奴隷たちの血と汗が混じっていることを知ると、コーヒーを飲むのをやめてしまうような潔癖な人々も出た。公会のある議員は、「1789年以来、出自による貴族制と宗教による貴族制は打破された。しかし皮膚の色による貴族制はいまだ残っている。それもまた今や最後の息をひきとろうとしている。これによって平等が完成する」と叫んだ。ハイチ革命に干渉してきたイギリスの本国議会では、この時期毎回のようになんか貿易廃止法案が提案されながら否決されつづけたことを考えると、ハイチでは事実上奴隷制が解体していたとはいえ、革命フランスの、特にこの時期の民衆の力を評価しないわけにはいかない。

数ヵ月後、この宣言のことを聞きつけたトゥッサンは、すぐにソントナクス側、つまり革命フランス側に鞍替えすることになり、今度は5000名の兵力を率いるフ

ランス軍の准将としてスペイン軍やイギリス軍と戦うことになった。1795年はイギリス軍にとり最悪の年となり、トゥサンは地方統領格に昇格する。そして1796年4月には総督補佐に任命される。

1801年7月8日、トゥサンは憲法を制定し、自ら終身総督に就任する。これは「自治領」レベルの権利を要求するもので、事実上の独立宣言といってもよいものだったが、トゥサンの口からは結局「独立」の二語が出ることはなかった。

ルフェーヴルはフランス革命を、貴族の革命、ブルジョワジーの革命、民衆の革命、そして農民の革命が複雑に交錯した、複合革命として理解しようとした。これまでの説明から明らかなように、ハイチ革命もまた、人種的色彩を帯びていたものの、一種の複合革命であった。そのなかの「黒人奴隷の革命」と、フランスで同時進行してきたのは「民衆の革命」だった。その「民衆の革命」はすでに力尽きてしまっていた。1799年11月のクーデターによりナポレオン・ボナパルトが実権を掌握する。西川らのいう第三の時期にすでに入っていたのである。

ナポレオンはハイチ干渉の準備を着々と進め、1802年1月には義弟のルクレールの率いる数万の遠征軍がハイチに上陸する。そして5月20日には植民地に奴隷制を復活させる。もちろんハイチには当面実施を見合わせるだけの慎重さがナポレオンにはあった。しかし、グアドループ島で奴隷制が復活したニュースはハイチにもすぐに届くことになる。しかし、トゥサンは革命フランスとの「単一にして不可分」に執着しつづけ、革命フランスそのものが変容してしまっていたことを認めようとしなかった。それがトゥサンを破滅させた、とジェームズは指摘している。結局、トゥサンは6月にフランス軍のワナにはまり捕えられてフランス送りとなり、1803年4月7日にジュラ山中で孤独のうちに獄死する。トゥサンがやり残した奴隷解放の仕事は、1804年1月1日にフランスからの完全なる独立という形で、腹心のデサリーヌによって完成されることになった。

たしかにフランス革命は「自由・平等・友愛」という普遍的な原理を提起した。しかし、ナポレオン後の世界は植民地主義を内包しつつ西欧中心の国民国家体系として再編成されることになる。そして「友愛」の原理を例にとれば、ハントも指摘しているようにそれは「兄弟愛」とどまり「姉妹愛」にまで及ばず、ナポレオン期には性差（ジェンダー）を理由に女性を家庭のなかに閉じこめておこうとする近代の家事イデオロギーが確立するように、植民地の存在や黒人差別などはやがて社会ダーウィニズムの名のもとに新たに正当化されるようになる。ハイチに即していえば、その奴隷解放は友愛＝連帯の原理によってではなく、「独立」

という形でしか可能ではなくなっていたのである。

III 世界システム論に向けて ——「早咲きの工業化」とハイチ革命

では、なぜハイチ革命は成功したのだろうか。カリブ生まれのマルクス主義者ジェームズは1791年蜂起を周到に準備され組織された大衆運動とみなし、その勝因を奴隷制砂糖プランテーションの特殊性・独自性に求めようとする。たとえば、補論の一節を引用すると、「砂糖プランテーションの大規模農業という近代システムは、当時のどんなプロレタリアートよりもはるかに緊密な社会関係のなかで奴隷たちに集団生活をおくらせる必要があった。収穫されたサトウキビは、精糖所まで敏速に運搬しなければならなかった。製品は海外市場に向けて輸出された。奴隷用の衣料や食糧までも輸入に頼っていた。したがって黒人は、当初から本質的に近代的な生活をおくることになった」。つまり、砂糖プランテーションの奴隷たちは、「当時のどんな労働者よりもむしろ現代のプロレタリアートに近い存在」（第4章）だったのである。

こうした砂糖プランテーションならびにそのもとでの労働の特殊性、カッコつきの「近代性」を最初に指摘したのはおそらく、戦間期キューバの人類学者のフェルナンド・オルティスであろうが、最近では人類学者のミンツ（1988年）により、それは「早咲きの工業化¹⁾」論に体系化されている。つまり、生産組織としての砂糖プランテーションはその歴史のごく初期から工業企業体的であった。いわばその初期形態にあたる、というのである。砂糖プランテーションは以下のような工業的性格を備えていた。第一に農業部門と加工部門、つまり精糖部門の統合。第二に、熟練労働者と未熟練労働者からなる労働力編成。第三に、時間に厳格なシステム。その他、生産と消費の分離、労働者の生産手段からの分離。したがって、労働力を引き出すために経済外的強制が用いられた点を別とすれば、世界最初の工場組織は、カリブの砂糖プランテーションから生まれたということになり、ヨーロッパの、特にイギリスの、産業革命にその起源を求めてきたこれまでのわれわれの通念は覆されることになるし、実際、ウォーラーズテインはここから農業資本主義概念を着想し、やがて壮大な「近代世界システム」論を描くことになるのである。

またミンツが「プランテーションがヨーロッパ側の必要に基づいてつくられたものであり、特有の仕方ですべて長期的にヨーロッパの経済発展に決定的な影響を与え

た」というとき、そして「カリブ海の奴隷とヨーロッパの自由な労働者は、生産の環によって結ばれており、ひいては消費の環によっても結ばれていたが、そうした環は単一の世界貿易システムによって生み出されたものであり、奴隷と自由な労働者とはそうしたシステムの一部を構成していた」と指摘するとき、ミンツは最近までウィリアムズ・テーゼ（ウィリアムズ 1968年）として知られてきたものをウォーラーステインの「世界システム論」流に言い換えたにすぎないことが分かる。さらに付け加えるならば、ウィリアムズ・テーゼは彼ひとりの独占物ではなく、ジェームズもまた本書において説明しているところであるし、しかもカリブの現実とマルクスの理論とからそれを導きだしたのである。

そのウォーラーステインは「近代世界システム」の第二の拡張期、年代では1730年から1840年代までを論じた近著（1989年）において、フランス革命およびナポレオン期を、すでに工業化過程を邁進しつつあったイギリスのヘゲモニーを打破しようとする最後の試みと規定し、その企図が敗れることにより、資本主義世界経済という近代世界システムは第三段階、つまりイギリスを覇権国とする産業資本主義の段階に移行するとした。服部春彦（1990年）もまた、国際貿易構造の変化からこのことを確認している。両アメリカに注目するならば、多くの新興諸国が国家間システムに加わるが、ハイチを例外として黒人や先住民がその非植民地化過程から排除されたことから明らかなおおりの、「近代世界システム」の構造を脅かすものではなく、むしろイギリスの政治的経済的庇護を受け入れることにより（ただし、米国はやがてその庇護のもとから離脱するが）、同システムを定着・拡大させることになるのである。

さて、ハイチの掌握にほぼ成功したトゥサンはどのような将来構想を展望していたのだろうか。

ジェームズがシェークスピアの『ハムレット』の台詞から「勇士が互いに奮激して火花を散らす白刃の間」と形容するような列強間の抗争のなかで、ナポレオン下のフランスに一抹の不安をおぼえたトゥサンは新興国である米国に期待を寄せたようである。実際、1799年には米国と貿易協定を結んだりする。しかし、イギリスの横槍がはいり、イギリスにも便宜をはからなければならなくなり、そのことがまた当時イギリスと交戦中であったフランスから不興を買うことになった。また米国との貿易高は、たしかに数年間は飛躍的に伸びたが、やがて米国大統領の交替を機に停滞していった。

また産業の面では、皮肉なことに、トゥサンもまた荒廃した国土と経済を立て

直すためには砂糖プランテーションに期待を寄せるしかなかった。プランテーションの解体・土地の再分配には進まず、プランテーションを離れようとする黒人たちを押し止めようとした。「自由労働者の共同社会」の建設という途方もない仕事への過渡的措置として、労働者にはプランテーションの生産物の四分の1が支払われるようになった。ジェームズはこれを古い専制主義から新しい専制主義への変化のひとつにあげている。その他、労働時間制が確立され、鞭打ち行為は厳しく禁止されるようになった。

また革命勃発当時には黒人人口は50万を数えていたが、内戦の10年間のうちにその三分の1が犠牲となった。労働力不足を補うためにトゥサンはアフリカからの黒人奴隷の輸入を黙認し、そのかわりハイチに到着するやいなや彼らを解放した。そして資本や技術の点でもトゥサンは当面は白人やムラートに頼らざるをえないと判断し、白人の帰島を奨励したり、さまざまな優遇策を設けたりした。不在地主に対しても、プランテーション収入の四分の1は彼らのためにとっておかれた。

一時的には白人・黒人・ムラート間の人種偏見も表面的には減少し、この再建策が成功するかにみえた。しかし、ここからトゥサンの悲劇が始まるのだった。ジェームズによれば、ロシア革命におけるレーニンとは対照的に、トゥサンは何でも一人で決める性格で、腹心の部下にすら自分の計画を話さなかった。部下の黒人将校にすら分からないことが黒人民衆に分かるはずはなかった。奴隷身分から解放されはしたものの、黒人たちはプランテーションに緊縛されたままだった。また、黄金が支払われ、鞭打たれなくなったというものの、もとの主人のもとで、あるいは新しい主人のもとで働かなければならなかったのである。結局は、トゥサンは自分の計画をハイチ革命の力の基盤である黒人民衆に共有させることに失敗したために、やがてナポレオン期フランスのワナにはまり、その壮大な実験を試みる十分な時間を与えられることなく、最期の時をフランスのジュラ山中で迎えることになるのである。

IV おわりに —— 今後の課題

このように、ジェームズは、今日のウォーラステインの世界システム論を準備するような卓抜な着想のもとにハイチ革命を論じたのであり、『ブラック・ジャコバン』の先見性は否定すべくもない。

ところでジェームズは、トゥサンの失敗の原因をその政治指導に求めようとした。したがって、それは回避可能なことであったから、トゥサンの悲劇性はいやがうえにも高まった。この部分はたしかに読みものとしてはおもしろいのだが、しかしながら、今日の時点に立ってみるならば、いくつかの疑問や他の解釈を提起することも可能であろう。まず第一に、指導層、特にトゥサンと一般黒人層との間には本当に階級的な対立はなかったのだろうか。上述の砂糖プランテーションをめぐる問題はさておくとしても、少なくとも政治文化的には、カトリック系文化を奨励するトゥサンに対して、黒人民衆はヴードゥー系文化を保持しつづけたであろうし、それは決して簡単に解消できるほど小さな問題ではなかったはずである。さらにいうならば、ジェームズ自身、1980年版の序文で触れている「逃亡奴隷」（ハイチでマルーンと呼ばれた人々。スペイン語ではシマロン）の果たした役割をどう評価すればよいのだろうか。要するに、ジェームズが断片的にしか扱っていない要素、たとえば「逃亡奴隷」・ヴードゥー教・女性などを加えて分析すれば、ハイチ革命はどのような像を結ぶであろうか。

第二に、世界システム論的にいえば、革命ハイチは何から何まで異端児であった。この時期のアメリカ大陸における非植民地化が、北米をも含めて「植民者」（スペイン語ではクリオーリョ、ハイチではコロンと呼ばれた人々）の手により達成されたのに対して、ハイチ革命では黒人奴隷によって達成されたこと一つをとってみても、ハイチ革命は異質の革命であった。したがって、その後の革命ハイチは、この世界システムからは、ウォーラステインの用語では「陶片追放」されるし、また、加茂雄¹⁰⁾（1989年）の用語によれば「封じ込め」られていくのである。イギリス（1833年）・フランス（1838年）・米国（1862年）・ブラジル（1865年）・メキシコ（1934年）。これらは、各国がハイチを外交的に承認した年代を表わしている。旧宗主国フランスに至っては、承認と引き換えに、1億5000万フランの賠償支払いをハイチに認めさせている。また、イギリスも米国も、「近代世界システム」が奴隷制を必要としなくなるまで、あるいは自国による奴隷解放が日程表にのぼるまでは、ハイチに承認を与えなかった。そしてこの間に、ハイチにかわる砂糖プランテーションとしてキューバを育成していったのである。かくして、トゥサンの壮大な実験も最初から解決不可能な矛盾を抱え込んでいたといえなくもないし、その悲劇性はいっそう高まることであろう。

しかしながら、これらの疑問点は今後の課題として、今は、キューバ革命の5年後の1963年にジェームズが希望をこめて書きつけた、次の一節を引用すること

により、筆を置くことにしたい。

「情熱は使い果たされたのではなく、内向しただけだった。トゥサンは、その情熱のために自分の生命を賭して試みた。この情熱は、耐えがたいまでに引き裂かれ、ねじまげられ、引っ張られながら、そのうえ毒薬を注射されながら生きつづけ、そしてフィデル〔カストロ〕が革命を開始したときその心のなかによみがえった。それはカリブの情熱であり、カリブ人の情熱である。この情熱のために、最初にしてもっとも偉大なカリブ人であるトゥサンは、生命を賭したのである」。

【追記】

C・L・R・ジェームズ『ブラック・ジャコバン ――トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命 ――』（青木芳夫監訳）は、今秋、大村書店より刊行の予定である。なお、年次大会や手紙によりコメントして下さった方々に感謝します。

【注】

- 1) 最近の研究によれば、トゥサンが奴隷反乱に参加するようになるのはしばらくあとのことであり、「カイマンの森」当時はジェームズの指摘するような接触もとっていないようである。
- 2) ジェームズとも親交のあった米国の黒人作家ラルフ・エリソンの小説に、『見えない人間』があるが、白人には自分の目の前の黒人が見えないのと同じように、われわれにとってハイチ革命は見えなくなっている。
- 3) ジェームズの略歴等については、（石塚 1990年）・（トムスン他 1990年：317-30）・（青木 1989年：2-3）を参照のこと。
- 4) ジェームズは、「トゥサンからカストロへ」（1963年版）においてハイチ革命以後のカリブ史を三つの時期に分け、苦難に満ちたカリブ・アイデンティティ模索の道を考察している。詳しくは（青木 1989年：6-8）を参照のこと。
- 5) 半世紀以上も前に執筆されたとはいえ、『ブラック・ジャコバン』は今日でもなお、ネグリチュードの創始者のひとりエメ・セゼールの『トゥサン＝ルヴェルチュール』（1961年）とともにハイチ革命研究の基本書でありつづけている。
- 6) 篠原は、いわゆる「社会史」グループと区別するためにこのように命名し、

そしてウォーラーステイン、スコッチポル、ヴェーラー、トムスンらをもその具体例としてあげている（篠原 1988年）。

- 7) フランスでもまた、ハイチ出身者を中心に、マシアック・クラブ（白人）とニグロの友協会（ムラート）に分かれて論戦をたたかわせていた。
- 8) オルティスは、キューバにおけるタバコ・プランテーションと砂糖プランテーションとを比較することにより、そのような結論を得た（Ortiz 1981年）。
- 9) 訳者による命名と思われる。
- 10) ただし、あたかも早くからイギリスがハイチを承認していた、という印象を与えるような記述があるのは残念である。

【参考文献】

* 青木芳夫

1989 「世界史のなかのハイチ革命」『資料ラテンアメリカ』第12号

* 石塚道子

1990 「解題にかえて —— ジェームズ、ハイチ、カリブ・アイデンティティ」C・L・R・ジェームズ『ブラック・ジャコバン』（青木芳夫監訳、大村書店）

* I・ウォーラーステイン

1987 『資本主義世界経済Ⅰ —— 中核と周辺の不平等』（藤瀬・麻沼・金井訳、名古屋大学出版会）

* Immanuel Wallerstein

1989 *The Modern World-System III : The Second Era of Great Expansion of the Capitalist World-Economy, 1730-1840s.* San Diego.

* E・ウィリアムズ

1968 『資本主義と奴隷制』（中山毅訳、理論社）

* Fernando Ortiz

1981(c1947) "Cuban Counterpoint: Tobacco and Sugar". Roberta Marx Delson(ed.) *Readings in Caribbean History and Economics.* New York.

* 加茂雄三

1989 「地域研究としてのカリブ海学」『地域研究と第三世界』（慶應義塾大学地域研究センター）

* 篠原 一

1988 「篠原一の〈市民と政治〉5話」（有信堂）

* トムスン他

1990 「歴史家たち」（近藤・野村編訳、名古屋大学出版会）

* 西川長夫

1990 「フランス革命と国民統合 —— 比較史の観点から」『思想』第789号

* 服部春彦

1990 「フランス革命およびナポレオン時代における国際貿易構造の変化」『思想』第789号

* L・ハント

1990 「共和主義の社会的・心理的基礎」『思想』第789号

※ 以上の3論文は、1989年10月にフランス革命200周年を記念して日本で開かれた国際シンポジウムにおいて発表された報告論文である。

* S・W・ミンツ

1988 「甘さと権力」（川北・和田訳、平凡社）